

(資料3)

宝珠院本堂、書院、忠魂堂（ほうしゅいんほんどう、しょいん、ちゅうこんどう）

員数：3棟

所在地：西尾市吉良町吉田

所有者：宗教法人宝珠院

1 登録理由

宝珠院本堂

内陣¹廻りは中備²臺股や欄間を彫刻で荘厳する江戸中期の浄土宗寺院本堂の貴重な遺構。
(登録基準：造形の規範となっているもの)

書院

三畳の大床と床脇に格天井³を張る壮大な造りの近代和風書院建築である。
(登録基準：国土の歴史的景観に寄与している。)

忠魂堂

戦没者慰霊のために建てられた一間堂で、向拝⁴廻りの日章旗の彫刻など時代性を反映する。
(登録基準：国土の歴史的景観に寄与している。)

2 概要

宝珠院本堂

木造平屋建、瓦葺、建築面積 299 m²、建設年代 延宝 3 年 (1675) / 安永 9 年 (1780)、昭和後期改修

書院

木造平屋建、瓦葺、建築面積 113 m²、建設年代 昭和 4 年 (1929) / 昭和後期改修

忠魂堂

木造平屋建、瓦葺、建築面積 20 m²、建設年代 明治 36 年 (1903)

宝珠院は、三河湾を臨む西尾市吉良町吉田に位置する。如意山国寿寺と号し、浄土宗西山深草派に属する。寛正 4 年 (1463) 教印宋俊⁵の開創と伝えられる。教印は天台宗の学僧で、宝徳 2 年 (1450) 比叡山から東国へ巡歴の途次、ここに草庵を結び、十一面観音を祀ったという。さらに富士山に詣で、山霊である大日如来を感得して当地に戻り、里人の帰依を受けて伽藍を造営した。五代住持珠光⁶の代に至って浄土宗に改宗した。天正 12 年 (1584) 秀吉より三十六石、その後、江戸幕府より同石の朱印が附された。

本堂は、棟札や寺の記録等により、延宝 3 年 (1675) に建立され、安永 7 年 (1780) から同 9 年 (1782) に大修理が行われたと考えられる。ただし、現在棟札は確認できない。

境内の北西に位置し、南を正面にして建つ。木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺の七間堂で、背面に後堂を張出している。内陣廻りは円柱・虹梁・組物・格天井を用いて仏堂風に扱い、他は角柱・内法長押⁷・蟻壁長押⁸・棹縁天井⁹を用い、組物を使用しない邸宅風な意匠としており、近世浄土宗本堂の一形式をよく示している。愛知県内の浄土宗本堂としては比較的古い遺構であり、当地域におけ

る近世中期の寺院建築の水準を示す遺構であるため貴重である。

書院は、本堂北東に接続して建つ。寄棟造、棧瓦葺で、棟を東西方向に通す。三畳の大床と床脇を備える上ノ間とそれに続く次ノ間から成る賓客用の御座敷で、格調ある意匠を示す近代和風建築であり、宝珠院の伽藍を構成する建築の一つとして貴重な遺構である。

忠魂堂は、正面にある石碑（昭和 45 年（1970） 建立）に建立について、「明治三十六年当山鎮守堂を改築英霊を奉祀して忠魂堂と称す」と記載されている。

木造平屋建、一間向拝付の小規模な一間堂で、本堂の南西に東を正面にして建つ。^{ほうぎょうづくり}宝形造⁸、棧瓦葺とし、頂部に露盤宝珠を上げる。内部は六畳の奥に厨子を安置し、格天井を張る。

向拝中備に「旭日旗と日章旗」をかたどった彫刻臺股を用い、手挟の各面には「マスト上の鷹」「軍刀を掲げる兵士」「双眼鏡を覗く兵士」「大砲」がそれぞれ彫刻され、日清戦争（明治 27～28 年（1894～1895））の戦場の一場面が表現されている。明治中期の日本の情勢が仏堂建築の装飾に反映された事例として貴重な遺構である。

内陣¹：神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。

なかぞなえ

中 備²：組物と組物の間にある各種桁を受ける支持材。

ごうてんじょう

格 天 井³：角材を格子に組んで裏に板を張った天井。

向拝⁴：神社本殿や仏寺本堂で屋根の一部が前方に突き出し、拝礼の場所となっているところ。

うちのりなげし

内 法 長 押⁵：鴨居の上にある長押（柱と柱をつなぐ横材。）

ありかべなげし

蟻 壁 長 押⁶：内法長押と天井の廻り縁の間に設けた長押。

さおぶちてんじょう

棹 縁 天 井⁷：竿縁という細長い木材を一定の間隔で渡し、その上に板を張った天井。和風建築の一般的な天井。

ほうぎょうづくり

宝 形 造⁸：平面が正方形または八角形の建物に用いられる、隅棟がすべて中央の一点に集まる形式の屋根で、頂上に宝珠などを載せる。



宝珠院本堂 正面（南面）全景 （西尾市教育委員会提供）



宝珠院書院 正面（南面）全景 （西尾市教育委員会提供）



宝珠院忠魂堂 正面（東面）全景 （西尾市教育委員会提供）